

昭和二十三年十月二十日 ナホトカゝ舞鶴港 大拓丸

復員

職歴 建設建築業兼農業

昭和五十四年 建設業施工管理技士取得

選挙管理委員会委員長など公職を歴任

平成六年 自治大臣感謝状受賞

地域社会のため貢献された功績大であります。

(滋賀県 堀井 源一郎)

少年志願兵のシベリア体験

京都府 今井 敬一

はじめに

昭和十八年十二月二十八日、満州第一六六二二部隊士官室にて転属の申告をしている一人の少年志願兵があった。この少年志願兵は、京都市出身で旧制中学半ばにて陸軍少年飛行兵を志願し、滋賀県中部九八部隊より十一人の戦友とともに同部隊に転属した十七歳の

少年志願兵、私こと今井敬一であった。

私は南方戦線に転属になる予定で三重県明野陸軍航空隊で教育を受け、転属部隊である滋賀県九八部隊で待機中であつたが、昭和十八年末、急遽満州に転属命令を受け、他の十一人とともに満州一六六二二部隊に転属して来たのである。急に満州に転属になった理由は、部隊から引率に來た愛知県名古屋市の加藤曹長に聞いたところによると、盲腸患者が出たために軍隊で言う員数合わせで決まったとのことであつたが、結果的にその時にシベリア抑留が運命づけられたと言つても過言ではない。しかし南方戦線に転属していたら、結果論であるが、今日この年まで生きていたか否かは不明である。人の運命はだれにもわからない、人間の命と同じで自分でも知る由もない。

満州一六六二二部隊は、本隊は新京緑園にあり、関東軍(第二航空軍八〇〇部隊直轄)の対空無線隊にて、部隊の任務は、満州主要地域にある基地飛行場に派遣分隊(通信所)を展開させ、航空情報の受信伝達、飛行機との対空通信、基地飛行場司令部との情報

の通信伝達、転科下士官、将校の通信技術教育、一般通信兵の技術教育等通信学校としての任務も果たしていた。本隊は新京西飛行場を経て新京緑園兵舎に移駐、各分遣隊は東満州方面より南満州に移動となり、約十個所に展開し、それぞれの任務に就いていた。部隊には、少年飛行兵、特別幹部候補生、他兵科よりの転科将校、下士官の臨時特別教育等もあった。

九州福岡出身の近藤部隊長以下四百人の精鋭が活躍していた。本隊のあった新京は、東経百二十五度十八分、北緯四十三度五十三分、標高は二百八メートルに位置し、緯度において北海道旭川、標高は山梨県甲府付近に匹敵する。満州建国以前の長春南満州鉄道附属地の面積は約五平方キロメートルであったが、昭和八年四月十九日に新京特別市となったころには百九十一平方キロメートルとなり、さらに昭和十一年には寛城子を行政圏内に浄月区域も編入したりして、国都にふさわしく四百四十平方キロメートルに市域拡大した（現在の長春は、周辺を五つの県に分割したため、市内区の面積は百五十八平方キロメートルである）。人

口は、昭和十三年三月末三十五万五千三百二十八人、昭和二十年三月末四十五万人であった。

気候は、春は遅く来て慌ただしく去るのが新京の特徴であり、四月から五月にかけて黄塵の蒙古風が来襲する。この時期は兵舎の二重窓の中まで微じんの砂ぼこりでザラザラになり、洗濯物は黄色く染まり、外出には砂防メガネがないと目をあけて歩くことができな

い。五月の中旬には春を飾る唯一の花である杏が咲いて、散ればやがて夏である。八月中旬には秋の気配が始まり、十月初旬には霜が降り、十月中旬から長い冬が始まる。気温は夏で最高三十七度、冬の最低気温は零下三十度を記録する。

春、秋の季節はほとんどなく、昼、夜の気温の寒暖が激しいのは大陸気候の特徴であり、日本本土と違い湿度が低いので、零下二十度くらいだと日中では暖かく感じることもある。最近の長春では、十二月～二月では零下十三～十六度、四月～十月では平均温度が七度から七月で二十三度で、戦後は大陸の平均温度も、我々が駐屯していた時代より、社会の工業化、地球の

温暖化もあり気温が上昇しているようである。

我が部隊の情報受信班においては、ハワイ、ニューデリー、モスクワ等よりの電波により「終戦工作」「ヤルタ会談」「ポツダム宣言」等の情報は早くより入手していたのである。

ヤルタ会談

一九四五（昭和二十）年二月、ソ連領クリミア半島のヤルタで開かれたアメリカ大統領ルーズベルト、イギリス首相チャーチル、ソ連首相スターリンの巨頭会談であるヤルタ会談では、対独戦の終結とその処理、ソ連の対日参戦、国際連合設立のための連合国会議の招集などが協議された。特にソ連の参戦は秘密協定で、アメリカの要望により対独戦終了後二カ月または三カ月後に対日参戦すること、その代償として、外蒙古の現状維持、南樺太のソ連返還、千島列島の引き渡しなどが決められた。

ポツダム宣言

ポツダム会談は、一九四五年七月～八月、ベルリン郊外ポツダムで行われた。米トルーマン、英チャーチ

ル、ソ連スターリン会談の結果、ソ連の対日参戦が決まると同時に、中国の同意を得て、日本に対してアメリカ、イギリス、中国三カ国宣言としてポツダム宣言を発表。鈴木貫太郎内閣はこれを黙殺しようとしたが、広島、長崎への原爆投下、ソ連の参戦などによって受諾、無条件降伏した。

終戦工作

一九四五年になると敗戦は決定的となり、支配層内部でも軍部も含めて戦争終結を図ろうとする機運が生じた。ソ連の仲介で条件付きで講和を実現しようという方針で、ドイツ降伏直後の五月、近衛文麿の派遣をソ連に申し入れたが、ソ連は拒否。ソ連の参戦で日本の企図は失敗した。

これらの情報は関東軍司令部では充分認識していたために、ソ連参戦時には、軍及び在留邦人を捨てていち早く朝鮮国境まで逃げたのである。

ソ連は、関東軍軍人及び在留邦人までもシベリアに抑留し、強制労働をさせるといふ、ヤルタ協定以上のことをした。一週間の参戦でソ連が満州から持ち出し

たものは大きく、そのやり方は、実にどさくさに紛れた悪質な略奪であった。

開原飛行場派遣隊

開原の街は、旧満州国（現在中国東北地区）四平省開原である。南満州鉄道沿線、四平を南に下がって鉄嶺との中間に位置し、西豊との分岐点の街であり、並木の緑とレンガ造りの民家がよく調和していて美しく静かな街であった。西方には広大で豊かな耕地が開け、地平線に真つ赤な夕日が没する風景は、まさに満州開原ならではの感であった。街には陸軍の病馬廠、開原神社、東幹バルブ工場、源酒造蔵、開原公園等があった。我々が駐屯する開原飛行場は街から徒歩で約一時間のところにあり、戦闘部隊、飛行場大隊、野戦工作隊、それに情報通信を担当する満州第一六六二二部隊二個分隊が駐屯していた。開原派遣隊長は山形県出身の長谷川軍曹で、神戸出身の松尾伍長、横浜出身の佐々木兵長、特別幹部候補生で新潟県出身の滝沢氏、衛生兵で岐阜県出身の大槻氏等が勤務していた。飛行場から街まで約一時間の距離があった。飛行場の

側道のポプラ並木を右に見ながら街まで三つの中国人部落を通り過ぎると開原駅に出る。部落の周辺には豚の親子が道をふさぐように自由に歩き回り、ニワトリやヒヨコが餌をついばみながら自由に遊んでいる姿は、内地の和やかな田園風景を懐かしく思はせた。

駅近くには満鉄の官舎があり、神戸市出身の山田さんのお宅によく伺った。私より少し年上の娘さんがいて、彼女は開原駅の国際運輸の図書館に勤めておられた。ご一家の皆さんには同じ関西出身というよしみで随分お世話になった。外出時に図書館に伺い読書をしたこともあったが、終戦後このご一家の方々はどのように過ごされたのだろうか。お訪ねしたが、既に移動されていて行方を確認することはできなかった。

昭和二十年八月八日、「ソ連軍参戦、満州に侵入」の情報を受信。地上部隊は驚くほどの速度で進攻してきた。八月十日、突然高い金属音とともに飛行機が急降下してくる激しい爆音と同時に、滑走路付近で爆発音が聞こえた。三機編隊のソ連機である。滑走路に待機中の我が方の戦闘機に対し機関砲射撃を繰り返し

ている。「あつ、ソ連機だ」とだれかが叫んだと同時に、我が方の高射機関銃が火ぶたを切った。しかし、そのときソ連機は機首を北に向け飛び去った。あつという間の出来事だった。滑走路にあった戦闘機はベニヤ板で製作された模擬機であったので、我が方の損害はなかった。これが私が目撃した最初のソ連機であった。

玉音放送

それから数日後、八月十五日朝の点呼時に、長谷川分隊長から「本日正午より天皇陛下の重大な放送がある。勤務以外の者は全員舎前に集合せよ」との達しがあった。各員緊張して受信機を前に、短波受信機で内地からの放送を聞く。遠く離れたここ開原では受信機の感度も悪く雑音で、放送内容は「堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び……」であつて即理解することができなかったが、前後の関係から判断し、戦争終結の宣言であることがおぼろげながら理解できた。

内地の様子も当時、同盟通信の情報によつて、東京、大阪、名古屋は連日連夜B二九の激しい爆撃を受

け、焼土化していることも伝えられている。広島に続いて長崎にも原爆が投下されたニュースも聞いた。サイパンの玉砕、キスカ島よりの撤退、フィリピンでの敗走など戦局の悪化はますます進んでいる。米軍は沖縄本島上陸に向けられている。内地の現況が手にとるやうにわかつてくる。これらの状況から終戦の前兆がひしひしと感じられていた。

二、三日前まで北に向けて飛行していた友軍機が南に向かつて飛んでいく。緊急着陸した操縦士が「戦いは終わった、我々は内地に引き揚げる」、そんな友軍機もあった。そんな時、新京の本隊が移動するとの連絡があり、「各飛行場に展開している派遣隊の隊員とは合流することが不可能である、おのおの派遣隊は所属の飛行場大隊と行動をとるよう」にとの命令が来たので、現実に敗戦を認識した。

本隊との再会

我々開原派遣隊は、命令に従い開原飛行場の大隊と行動をとるべく環境整理と兵舎の整備を行つていたところへ、「本隊が開原駅に到着したので合流する

ように」との連絡を受信、直ちに移動を開始した。無線機のほか装具、弾薬、糧秣、被服、その他をマーチヨに分散して本隊が待つ開原駅に急ぐ。こうして開原派遣隊は幸いにして移動してきた本隊と再会することができた。あの混乱の中で全く奇跡に近い再会であった。もし本隊と再会することがなかったら、我々開原派遣隊は他の部隊に紛れ込み、その後どのような運命をたどっていたか、改めて幸運だったことに感謝した。本隊は、貨車一列車を仕立て、兵器、無線機、機材、食料、被服等を整え新京駅を出発して南下してきたが、開原駅で機関車が故障し、修理後も南下して移動中で、偶然にも再会できた感激は今もって忘れられない。

我が内務班長荒井軍曹に無事本隊に戻ったことを申告。六カ月ぶりに見るおやじさんの顔、夏焼けたその顔は一段と精悍さが目立った。「今井、ご苦労だった」、敵しさの中に愛情のこもった一言に、荒井内務班長に対し一段と信頼感を強くした。私は部隊でも最も若い少年志願兵であり、特に目立つ存在であった。

荒井軍曹は歩兵本科の通信からの転属下士官で、内務班長というより教育者として適任な人物であり、戦後五十年過ぎた今日でも、私はおやじさんとして深く信頼し、お付き合いをいただいている。同じ内務班の本隊勤務の先輩、同年兵等にも再び再会できた。その夜は貨車の中でぐっすり眠った。

貨車は停車したままで、機関車も戻ってくる様子がないまま日が過ぎた。やがてソ連軍が開原の街に侵入してきた。我々は市内の元中国の保安隊の兵舎へ移動した。自動小銃を肩にかけた女性兵士の姿を初めて見た。我々の目には珍しく映った。この地区に駐屯していた各部隊はソ連軍の命令で開原公園に集合をさせられ、ここで武装解除が行われた。いよいよ我々はソ連の捕虜としての扱いを受ける立場となった。しかし、我々は幸いにして部隊長以下一部を除いて旧部隊のまま一つの組織としてまとまって生活していたので、力強く感じ、何の不安もなかった。我々は幕舎生活を送りながら、東幹バルブ工場の解体作業や貨車の積み込み作業などをした。この作業は寒風の吹く十月末まで

行われた。

シベリアへの移動

十一月初旬、開原の街を移動し始めた。街でも寒風が肌を感じる気候となっていた。これから長い冬が始まるのである。噂によると、我々はウラジオストック經由にて祖国日本に帰国することであった。我々は、三カ月前本隊が南下してきた鉄路を北に向かって出発した。

列車は北進し、新京駅に着いた。ここで下車を命ぜられ、大同学院まで徒步行進であった。駅前の児玉公園にあった児玉大将の馬上の銅像も破壊されており、軍が使用していた建物施設も破壊され、日本人街も商店も大変な日に遭った様子であった。大同学院へ歩く集団も、かつては軍人として市内を闊歩した人間であったが、今の姿はソ連の警戒兵に追い立てられた捕虜の集団である。大同学院では所持品検査が実施され、余分な衣料、毛布、食糧品等が没収されたが、米、乾パン等は幾らか確保することができた。ここでシューバー（防寒外套）が渡された。我々は、第二航空軍即

ち満州の空軍部隊であり、防寒に対する知識を各自が習得していたため防寒に対する被服は所持していた。

ソ連軍が仕立てた列車、有蓋車（貨車）に詰め込まれ、北進した。私はこの時点ではウラジオ經由で日本に帰国する夢を捨てていなかった。それは、ハルビンより東へ向くとウラジオストックに向かうからである。ところが我々を乗せた列車はハルビンから西北へ進行した。チチハル、そして興安嶺を越えハイラルへ。ここまで来ると次は国境の街満洲里である。これで祖国日本への帰国は絶望的になった。列車は国境の満洲里で停車した。車内には用便をする設備がない。列車が停車するたびに付近で用を足した。ここでは、景色の見える窓、穴等は外部から板で蓋をされ、車内は真っ暗のままソ連領へ向かった。

日本人捕虜

捕虜としてソ連での抑留生活が始まった。日本人捕虜は、我々のように満洲里から国境を越えた集団と、黒河からブラゴエシチェンスクへ国境を越え抑留された集団と、二つに分かれていたようである。我々の列

車は何時間走ったか、シベリア鉄道の屈指の都会チタから支線で山中へ連行された。ドリビアンというところまで下車を命じられ、それから極寒の山中を歩くことになった。チタ付近の収容所（ラーゲル）には一万人もの捕虜が作業をしていた。ソ連抑留者は六十万人を数えた。これほど多くの日本人捕虜をソ連国内のあらゆる地域で強制労働をさせたのである。そのみでなく、満州の大きな機械設備を解体したのもや多くの食糧品をソ連に持ち去ったのである。参戦して一週間の戦果にしては、普通では考えられない戦果である。その他ヤルタ会談で定めたように千島、樺太等領土までも手中にした。

国境を越えて何時間が過ぎたのだろうか。チタの街を通過した。チタは満洲里からシベリア鉄道で三百キロメートル入ったシベリア屈指の都会である。東へはハバロフスク、北へはイルクーツクに通じている。我々を乗せた列車はチタから支線で山岳地帯へ向け走り続けた。もう夜になっていた。列車が停止し、警戒兵（ソ連カンボーイ）が大声で「ダワイ、ヴィストラ

（早く急いで）」と列車からの下車を促す。あたりは灯がなく、真つ暗闇の中である。列車は山中の引込線の終点のようである。「ここはどこか」と聞くと、「ドリビアンだ」とソ連兵士が言った。山中にて気温は低く、寒さは体に差し込んでくる。体、手、足はいつも動かしていないと凍傷にかかってしまう。

警戒兵は少数だがマンドリンといった強力な自動小銃を所持している。我々は武器を所持していないが、八月中旬までは関東軍の精鋭で最も強いと言われた軍人の集団である。若い警戒兵達も、我々と同じく行軍し、黒バンの乾いた携帯食糧のみで与えられた任務に就いているのだが、寒さ、空腹、睡魔は我々以上で、その上彼等は大きな集団を警戒している。その「緊張感、恐怖感は大変大きかった」と、後日チタの収容所のソ連兵から聞いた。これは実感であったと思った。かつて満州古天子という飛行場の通信所に勤務した時であった。この飛行場の掩体壕（飛行機を隠す壕）を建設中で、屈強な中国人が三百人も使役（作業）をしていた。下士官を含む数人の歩哨が勤務立哨するのだ

が、他の歩哨に立つよりこの勤務が一番恐怖感が大きかったと飛行場大隊の兵士が言っていたことを思い出した。

ここでまたソ連将校の所持品検査が行われ、検査のたびに所持品を取り上げられた。ここまで新京を出発して何日かかったか、ここにたどり着くまで食事も用を足すことも寝る場所もなかった。焚火で暖をとり、凍るような寒さの中で眠れぬ夜を過ごした。いつになれば足を伸ばして寝ることができるだろう。

三日目早朝より作業が開始された。まず寝る場所を確保しないと極寒のシベリアの山中では生きていくことは不可能である。このことは日本人捕虜のだれもが知っていた。早速伐採組と穴掘り担当組に分かれ、作業が始まる。シベリアの土地は冬には四メートル以内は凍る(都会でも水道管は四メートル以下に敷設する)。早く掘らないと土地が凍る、焚火をしながら穴掘りをした。つるはしなどはない。ボールとスコップのみで作業を進める。やがて幅約八メートル、奥行き約二十五メートル、深さ約二メートルの穴が掘れた。

その上に伐採組が作業してきた松の生木が屋根に丸太のまま使用され、その上を松葉や苔で覆い、土を乗せ、古代人が住んだ穴ぐら生活そのものである。室内は二段の寝台を造り、みんな折り重なって寝たが、背筋が寒く目が覚め、眠れぬ夜が続いた。昭和の時代に古代人の生活をしたのは我々のみであろう。もちろん電気はない。夜間の灯りには松脂の多い松明を使用した。油煙が出て、部屋、毛布、衣類、防寒帽を被って寝るので防寒帽、顔、手と、あらゆるものが真っ黒で、雪焼けした顔は日本人離れをした異国人のようである。この姿は経験した者でない現実が出ないが、実に情けない哀れな姿であった。

六時に起床するが、冬の六時は寒くて暗い。顔を洗う水もなく、朝食は大豆の汁を飯盒に三分の一ほど。昼食は「黒パン三百五十グラム一切れ」と言うが、だれも計ったことがない。飯盒に入れ、腰にしっかりと付けて作業する。作業中も腰につけていないと、あっという間に盗まれてしまう。空腹の慢性化で、食べるものには自分のものも人のものも見境がつかぬような神

経になっている。情けないかぎりである。餓鬼とはこのような姿を言うのだろうと感じた。昼食の黒パン一切れについても、最初は空腹に耐えかね朝食の大豆汁と同時に食べてしまい一時的な満腹感にひたったが、夕方まで作業をする目目が回るほど腹が減り、とてももたない。そこで、半分とか三分の一とか、へりの皮の部分のみを残して夕方のスープに入れるとか、昼食の黒パンの食べ方も工夫をするようになった。

いずれにしても、強制労働と飢えと寒さ、希望のない毎日が続く。この収容所には炊事設備がなく、必要な水と食事は近くの収容所から運んできたようである。この収容所に着いた時、大きな穴を掘って全員銃殺されるのではないかと感じたが、銃殺の恐怖は免れた。

日時の記憶が定かでないが、ある日突然トラックが来て、移動するのだとトラックに乗せられた。どこへ何をしに行くのかも知らないままで、手足は凍りつく寒さのためみんな体を寄せ合い哀れな姿で、シベリアの平原、凍りついた大地を、山を越え部落を過ぎて何

時間走ったか、人影もまばらな山あいの部落に着いた。有刺鉄線が二重に張られ、四隅の一角には高い櫓があり、自動小銃を抱えたカンボーイが警戒している。この自動小銃はマンドリンと言われ、ソ連兵が肩にかけ弾倉を胸に抱えていると楽器のマンドリンに似ている。この自動小銃は、腰に当てたまま目標に対して射撃のできる強烈な武器である。着いた所は完全な捕虜収容所であり、そして途中で別れた旧部隊が主力のクラスニヤード収容所であった。部隊の先輩戦友とも再会できた。

ここでの労働は伐採作業が主で、各作業班に分かれノルマが課せられている。毎日六時に起床し、七時には作業に出る前の点呼、ソ連軍の下士官が人数の確認をする。柵の外は警戒兵が作業場までついてくる。現場に着くと伐採用の二人引きの大鋸とタポール（斧）が渡され、作業始めになる。シベリアの雪は北陸のように多くなく、雪の質もサラサラで、ひざぐらいしか降らない。しかし大きなシュエパーと防寒靴、毛布の生地で作られた防寒手套、それに防寒帽とい

つたいでたちが伐採作業の姿である。八、十メートルといった大木が倒れる時の凄まじさ、十代の少年兵に身の縮む思いがする瞬間である。こんな大木がシベリアの山中では凍って立っているのである。今まで日本人捕虜以外に人が立ち入ったことのない地である。大木が倒れる時に凍った枝が互いにぶつかり合い折れて降ってくる。大木が地上に叩きつけられ雪煙が舞い上がる。時には方向が定まらず、長い大きい氷の塊となった大木が予想もしない方向に倒れることもある。自分達で切った木なら多少なりとも反射的な行動がとれるのだが、付近で別グループが切った大木が倒れてきた場合、雪の斜面では体が思うように動かない。手足を挟まれたり、頭を打たれたり、極寒の地で倒れ異国で眠っている先輩戦友も何人かあった。

私も二十年十二月二十八日、伐採作業中、隣で作業をしていたグループの大木の凍った太い枝が頭に落下してきた。こちらは二人で腰をおろして大鋸で大木を切っている最中にて、バリバリという音が聞こえたが瞬時のことで、ガンと衝撃があった。同時に斜面を

転げ落ちた。頭に激痛を感じたが、出血がない。零下三十度もの空気中では血が凍って噴き出すことはないように感じた。激痛を我慢し収容所に戻り、医務室へ入り防寒帽を脱ぐなり激しく出血した。しかし骨には異常なく、何日間かの休養ももらい、その後伐採作業より外れ他の作業につけてもらったのも不幸中の幸いであった。医療設備が整っていたこと、多田軍医が外科医であったこと等に感謝している。ここでも少年兵はまた幸運に恵まれた。

クラスニヤードラーゲルはかつての近藤隊が主力の収容所であり、収容所内も秩序が保たれ、通訳には鬼木中尉、伊藤少尉が当たり、階級組織は生きていたが、ともに苦勞をしてきた戦友であり階級に対しての反発はなかった。ソ連側も、捕虜に対する強制労働を実施させる上で旧軍隊の組織、命令系統を利用し、作業本部を設置し、旧将校を本部長、下士官後藤班長を作業の割当班長として、作業本部を動かす労働に就かせることはソ連が理想とした初期の政策のようであった。クラスニヤード収容所は、他の混成部隊の収容所

と違い、ソ連にとって最も理想的にノルマを達成したラーゲルであったと思つてゐる。

昭和二十二年春だつたと思う、チタの街で、技術者の募集があるので技術を有する者は申告するようにとの通達があつた。私は特に技術は有していなかつたのだが、せっかく来たソ連の都会も知っておくことは決してマイナスにならないと考え、二、三人の若い戦友に話したところ、申告しようということになり、思いつきで技術者であるとの申告を提出した。私は入隊前は旧中学生であつたので、技術などあるはずがない。しかし、学生勤勞奉仕で大阪陸軍造兵廠（陸軍の兵器工場で、ここにはあらゆる技術者が集まつていた）へ週二回も通つた記憶の中から、高射砲の部品を製造するフライス盤という機械があるが、その機械を動かすフライス工という技術者であるとの申告を出した。他の二人の友とクラスニヤードのラーゲルを離れ、ここより四キロ離れたチタの街を目指してトラックに乗つた。大きなトラックで三十人ほどが同乗していたが、前の方の片隅にまゝまつていた。同乗者は語らなかつ

た。私がそうであつたように、期待と不安が交差した複雑な気持ちであつたと思う。

チタ第七分所

トラックはチタの街の山手にあるチタ第七分所ラーゲルに到着した。チタは過去の山奥のラーゲルと違い、ソ連軍極東司令部のほか、広大な飛行場には常時軍用機が発着し、バスが走り、乗用車、映画館、銭湯もあり、レンガ建てで三階、四階建ての建物が並ぶ都会であり、満洲里からシベリア鉄道に乗ると最初の都会の駅がチタであり、フレイブコンピナート（パン工場）、ミヤソコンピナート（肉工場）等の大きな工場もあつた。

我々のラーゲルの隣に御影石の大きな石碑があつた。石碑には広島五師団司令部跡と刻まれていて、その周囲に墓石が三つ建つていた。これは、大正七年、日本軍が極東におけるロシア革命に対する干渉戦争であつたシベリア出兵の際の跡であつた。私達が抑留された二十五、六年前、一九一九年、日本軍の大部隊が、シベリア各地で生まれた革命政權を倒そうとして

革命軍やバルチザンを相手に五年間も戦争したのである。しかし、学校ではシベリア出兵のことについてはどんな戦争だったのか教えなかったし、一般の書物にもあまり載らなかったから、その内容、本質は不明であつたが、チタの街に来てこの大きな石碑を見て、五年間も長期にわたり戦つたシベリア出兵は日本軍の敗戦に終わったことをロシア人より聞いた。日本軍はイルクーツクまで進駐したが、革命軍やバルチザンにより敗走した。チタには広島五師団が駐屯したが、ここがその跡である。私達が移動してきた第七ラーゲルは、くしくも二十数年前にこの地で苦戦した広島五師団の司令部跡であつた。

本部では、陸軍士官学校出身の山科中尉、多田少尉、下士官数人がこの収容所の作業本部を統括してゐた。将校は帯刀し、階級章は下士官までつけていたが、技術者として他の収容所から転入してきた人々は一様に階級章はつけていなかった。このラーゲルは約五百人、寮は友邦寮、友盟寮、曉寮の三棟の他に、作業本部、医務室、炊事棟は収容所入口、ソ連軍兵舎前

に位置してゐた。食堂は大きな建物であつた。散髪、服、靴の修理班が棟に付随してゐた。

ラーゲルの所長はソ連の少佐で、政治部員（共産党員）、中尉、警戒兵数人がおり、作業についていく警戒兵は別に軍から派遣されてゐた。労働は、山奥の伐採を主な作業とするラーゲルと異なり、作業はいろいろな種類があつた。建築作業、製材所の作業、それに付随する大工、左官、電気、板金等の専門的な作業のほか、食糧運搬、フレイブコンビナート、ミヤソコンビナート、水道管を埋設する土木工事、そのための道路整備、石畳、敷石の道路作業、それに付随して山で石を出す作業場（カーミンナカリエル）、人力で大きな石を出す、それを三十センチ・十センチに割る作業、割つた石を街の道路現場に運ぶ作業等のほかに、季節的にソフホーズ（国营農場）、コルホーズ（協同組合）での農作業等である。ノルマのない作業では、ロシア人の軍関係の家庭の薪割り作業、時間での作業、チタ貨物駅での材木、土砂その他の積みおろし作業等、作業内容も実に多く、夏は作業の帰りにチタの

街外れの川で入浴がわりに体を洗った。

チタの労働

冬は週一度入浴（バーニア）に行った。もちろん日本や中国のように浴槽はないが、時間でシャワーより湯が出る。湯が出たら急ぎ体を洗う。二度目の湯が出れば流し場で仕上げをして、着替えの部屋へ。二度目の湯は三分五分、これが終われば次の組が入れ替わって入浴するので、先の組は追い出される。最初はこの要領がわからないので、石鹼の付着したままで追い出されたといったエピソードもあった。入浴は都会の収容所なればこそそのことで、山奥のラーゲルでは考えることもできない夢のようなことであった。ソ連国内も独ソ戦の戦後のことであり、技術を持ったヤポンスキーは大切に重宝に取り扱われたことは事実である。

またチタ第七ラーゲルで、奇遇にも私と同じく京都市出身で、私が幼児の頃通った幼稚園の隣の住居の奥村軍曹がこのラーゲルの炊事班長であった関係で、ラーゲルのソ連将校や警戒兵、収容所の作業本部との関係も厚く、少年兵の私を炊事班の作業員に加えていた

だいたいは、チタ第七ラーゲルに技術者志望したこととは間違いなく幸運であったと思った。この作業場では、シベリア抑留以来味わった飢えと空腹は忘れていた。このラーゲルには食品を扱う作業場もいろいろあり、各自が持ち帰った食品を物々交換をする姿を見かけるのも、街のラーゲルなればのことであった。

炊事場の隣が診療所、病棟は本部の並びに位置していた。そのソ連軍女性中尉医師（ドクトル）は、二十数年前、シベリア出兵のヤポンスキー（日本人）に可愛がられたと言う。そのほか看護婦のナターシャおばさん、日本衛生下士官（鹿児島出身）坂口軍曹が勤務、病棟には同じく日本軍医将校ほか、衛生下士官、衛生兵が勤務していた。以前のクラスニヤード収容所では、伐採の作業中、材木の下敷きになり命を落とした先輩戦友を何人も見てきた。母、妹、弟の待つ祖国日本では私の生死は不明になっている。何としてでも生きて日本の土を踏むことであると思っていた。

そのうち、ソ連兵士よりこんな噂を得た。「我々ソ連兵士が故郷に帰る。召集解除でダモイ」と言う。

「かわってヤポンスキーサルダート、ヴァエンナブレ
ンヌイ フ斯巴マガイヌイカマンド（日本人兵士捕
虜、補助警戒兵が近々に集められる）」とのニュース
である。炊事の作業が終了すると医務室の看護婦のナ
ターシャおばさんにロシア語を学びに通った。言葉を
学ぶことにより、この国や住民を理解し、これを武器
に生きて帰国する可能性も大きくなると考え、補助警
戒兵、略してBKになる機会を持った。体力も技術も
持たない少年兵の私にはこれが最大の技術であった。

補助警戒兵「BK」（ヴァエンナブレヌイ フ
斯巴マガイヌイカマンド）

抑留生活三年目の春を迎えたある日、作業本部より
呼び出しを受けた。所長少佐、ソ連将校中尉、共産党
政治部員立ち会いによる補助警戒兵の説明と、本人の
意志の確認であった。補助警戒兵は従来ソ連兵士警戒
兵の補助として、二十五人以下の作業場では一人で朝
七時作業に出発し、夕方五時にラーゲルに戻り、出発
時と同じくソ連の点呼を受ける。五十人ならば二人、
ソ連の兵士一人と日本人BK一人、ソ連兵はマンドリ

ンを抱えているが、ヤポンスキーは腕に白地に黒でB
Kと記入した腕章をつけている。説明によるとBKは
作業場に着くと、カマンジール作業責任者に今日一日
の作業の内容を聞き、作業をするヤポンスキーに伝え
る。その場合、必ずベアチチソ（五時）ラーゲル
ダモイを確認する。五時前になれば作業を終了し、ラ
ーゲルに戻る。作業中は事故のないようにガードする
ことが任務であることを知らされた。したがって、多
少のロシア語ができないとソ連カマンジールと仕事の
打ち合わせができない。ソ連側より「作業中に逃亡者
が出た場合、どう責任をとるか」と聞かれた。ソ連立
会人は「日本人は、特に君達軍人は腹を切って責任を
とると言うが、ソ連ではその返事はブローホ（駄目）
である」と先手をとって言われた。「ソ同盟の法律に
従ってその責任を果たします」と言うのが正しい答え
だと聞かされた。

ソ連兵士の年齢は二十二、三歳。全員とは言えない
と思うが、彼等は計算に弱い。アジン、ドバー、トリ
ー（一、二、三）と数えるが、五十人を超えるとなか

なか数えられない。五人ずつ並べて五、十、十五人と数えた。下士官が点呼に立ち会うと時間がかかるので、出発までに寒さの中で我慢させられた。通常、抑留者の作業は零下三十五度以下になると中止になるのだが、三十五度以下の日が何回もあつたが寒さのために作業を休んだ日は一度も記憶になかった。ソ連には九十四の共和国と二百近い民族がいると言われていた。日本人に対しても人種差別は特になかった。彼等は勤務と兵役とで我々に接していた。ソ連の警戒兵も個人的には我々に特に敵愾心を有しているわけでもなく、遠く離れた故郷を思う心は彼等も同じで、早く郷里に帰りたいと言っていた。

シベリアの夏

シベリアの夏は白夜で、日本のように完全に闇夜になることはない。シベリアの春がやってくるのは五月の末ごろである。気温も日々上がってチタの川の氷も解け出し、若草が萌えてくる。ソ連人達も重いシューバーを脱いで軽装になるが、着替えを持たない我々はいいつも同じものを着ているので、夏になれば重く

て、内側に毛があり動物の臭いのするシューバーを返納するぐらいであった。夏は暑いことは暑い、日本の暑さのようにムシムシする暑さでなく、木陰に入るとひんやりと涼しさを感じた。昼間が長くて夜の十時になってもまだ明るい。「白夜」は暗夜にはならない。明け方のようにぼんやり明るい空で、そのまま夜明けを迎える。うっかりおはぎや握り飯、ぜんざい等々食べる話をしていると、気がつくると十二時になっている。午前三時にはチタの街は夜が明けてくる。内地でも夏は四時三十分から五時には夜が明けてきたと記憶をたどっていた。夏の夜は白夜だけが睡眠不足の原因でなく、南京虫にも襲われた。建物は日本で言うログハウスで、側面も屋根も部屋の仕切り等も丸太でできているのと、部屋の温度が夏冬等こうした害虫には大変暮らしやすい建物であり、そこに我々ヤポンスキーの捕虜が詰め込まれてきたのだから、我々のように飢えにあえぐのとは反対に、南京虫は豊富なる食糧に恵まれた吸血鬼であった。

ラーゲル内の便所は、有刺鉄線のそばに大きな穴が

掘っており、その上に三十センチ間隔で板が渡してある。その上で零下三十度の寒い日でも尻を丸出しにし、周りに仕切りも曲いもなく一列縦隊であるから、前の人の出すモノをじっくり見ることになる。腹の調子が悪い時、一般食より違ったものを食べた時などは青空の便所に行くタイミングを考えて行かなければならない。穴がいっぱいになれば、その穴を埋めて次の場所を掘った。

捕虜の一日の食事の内訳を炊事班に入って聞いたのであるが、黒パン三百五十グラム、雑穀四百五十グラム、野菜六百グラム、魚百五十グラム、砂糖二十グラム、塩三十グラム、石鹼、タバコ五本である。チタ第七ラーゲルでは大体基準が守られていたようだが、ラーゲルの場所によっては、特に不便な山奥のラーゲルでは、ソ連人の給与も悪かったのであろうか、給与規定の半分以下であったり、また給与係がラーゲルの担当軍人と共謀してピンハネを行っていたようである。我々の最初のラーゲルもシベリアの過酷な強制労働の代表的なもので、ここにいたヤポンスキーは災難だっ

たとしか言うはかはない。

ソ連では糞を日本のように作物の肥やしにするようなことはない様子であった。もっとも土地が凍るので、水分のあるものは肥料には効果がなく使用しないようであった。冬季は凍っているが、五月の解氷期には水に流す作業の使役もいる。

ある時、ラーゲルの水くみ馬車に使用している馬がこの大きな穴に落ち込んだことがあった。ラーゲルで毎日使用する水を街に汲みに行く大切な馬であったので、ラーゲル内で作業をしている人達が駆けつけて、首にロープをかけたままではよかったが、近寄るところらが穴に落ち込むので近寄ることができず、ロープを皆で引っ張るしか手段がなく、強く引くと首が縮まるので、馬は苦し紛れに暴れ深みへ沈むばかりであった。ついに姿は便の深みに沈んでしまった。動かなくなったので皆でロープを引いて引き出したが、残念な結果になった。五百人も人がいるとみんないろいろな職業を持っている。肉屋さんも何人かいたので、ソ連将校との話し合いで何日か魚のカーシャ（おかゆ）に

肉が入っていた。何も知らないヤボンスキーは嬉しうに肉入りだと飯盒の中をのぞき込んで食べたが、この肉の事情を知っている者は喜ばなかったのではないだろうか。

シベリアの星空

中国満州で美しい大空を仰ぎ見て、遠く離れた故郷を思い、家族を偲び涙したこともあったが、シベリアの星空はそれ以上に美しかった。北斗七星も内地で見えていたそれと違い北極星が頭の上で大きく光っている。空気が汚染されていないのでその輝きは一段と美しく、同時に、この国に捕虜としており、いつ帰国できるか希望も喜びもない日々を送っている私には、この美しい星空は心の慰めにもなった。ここチタ第七ラゲルでは、北の空にオーロラがよく見えた。薄黄色の光が帯のように見えたり輪のように見えたりして、幻想的な不思議な気がして北の異国にいることをしみじみと感じた。

シベリアでは七、八月頃にキャベツの収穫をする。

収容所内の大きな樽に漬け込まれるシベリアのキャベ

ツはとでも味がよかった。野菜はカルトーンシカ（ジャガイモ）、トマト、ニンジン等があったが、皆小粒であった。

チタ第七ラゲルは、広島県の歩兵部隊がこの収容所の主力であり、将校、下士官も旧部隊の階級が支配していた。中国以来何年間も苦勞をともししてきたが、捕虜になって三年近くになるのに、軍隊でもないのに階級章で支配されていることについて、階級の低い古年兵や若い兵士達、それに他の収容所より転入してきた下士官（技術者）はその矛盾に承服することができず、収容所内には険悪な雰囲気の流れた。古年兵や若い兵士達の不満は大きな力となり、ある日突然、作業集合時間の合図があっても何人も従わなかった。このラゲルの日本側指揮官で士官学校出身の将校は、集まった数十人の前で軍刀を抜刀して訓示を始めたので、ソ連側が驚いてマンドリンを抱えたソ連兵士数人、ソ連将校も含めて彼等を包囲し、解散を命じた。

民主連

ソ連側にとつても、ヤボンスキーの捕虜取り扱ひの転換期となつた。旧部隊の組織をそのまま利用して作業ノルマの向上を求めてきたソ連側も、旧軍隊を解体し思想面からソ連式民主運動にその力を転換していくことが必要な時期が来たようである。その後、士官学校出身の将校は第七ラーゲルからいつの間にか姿を消していた。ハバロフスクの収容所へ送られたとの噂があつたが、その後の消息は不明であつた。広島旧部隊の中からも、政治学校と言われるところにソ連の思想を学びに若い兵士が何人か出ていった。

我々の旧部隊の一員で青森の農家出身の特別幹部候補生（特幹）の一人が、政治学校の教育を修了し、第七ラーゲルに民主運動の指導者として赴任してきた。彼とは以前のクラスニヤードラーゲル以来の再会であつた。このラーゲルも、ソ連の指導もあり急速に民主運動が盛んになってきた。階級章をつけている人は一人もいなくなった。そして将校や下士官を呼ぶ場合も全部「さん」づけになつた。作業も八時間労働が終わ

れば特別な用のないかぎり自由だつた。何年も旧軍隊組織の中で下士官や古年兵にいじめられてきた若い兵士が、労働者の国ソ連が大変暮らしやすい国だと思つたかといふ一つの証拠でもあつた。若い兵士にとつてラーゲル内の民主運動は、自分達が人間的に解放されたような錯覚に陥つた感じで、この運動が拡大していった。

ソ連側としては、今度はこの運動の力を利用し、ヤボンスキーの捕虜にノルマを加えた作業をさせたのである。私は幸いBK（補助警戒兵）の仕事が与えられており、ソ連のハラシヨラポーター（よき協力者）として見られていたので、ソ連の社会主義思想に洗脳されることもなかつた。毎日のように元将校、下士官、農民・労働者出身以外の人々がつるし上げにされ、さらに自己批判の内容が民主的でなく、いまだブルジョワの思想を持っていると言つてしつこくつるし上げをされたりした。私達のラーゲルから元憲兵、特務機関、警察官等の仕事に従事していた人々は他のラ

ーゲルに移動していった。

昭和二十三(一九四八)年正月、シベリアで迎える三回目の正月である。ソ連ではノーブイゴード(新しい年)と言って正月はないが、第七ラーゲルでは一日だけ休みがあった。十二月のクリスマスには彼等は三日間休むので、時間で消化せねばならない。貨車の積みおろし作業のような特別なもの以外は作業が休みになった。

チタの街を流れる川も五月頃までは凍結するので、橋は歩行者専用になり、車は凍った川に沿った側道を通行し、また川を道路がわりに使用した。川の上を大きなトラックの荷台に乗って作業に行く時の寒さは想像もできない寒さである。風速一メートルで体感温度がマイナス一度下がるので、零下五十度にはなる。その寒さはシューバーを通して体に突き刺さる感じであった。

ダモイ東京

一九四八年三月頃になると、何組もの人員移動が行われ、ダモイ東京(帰国)の噂と同時に、作業にもノ

ルマが重くのしかかった。ソ連将校に聞くと、このラーゲルは五月で閉鎖とのことであった。ダモイと言って移動したのに他のラーゲルへ連れて行かれて作業をしたとの話も聞いた。日本へ帰国する港ナホトカまで行ったのに、また貨車に乗せられた等のニュースもあった。そして五月になったが、一向に閉鎖される様子もない。しかし、人員の移動は行われている。暁寮が全員移動して空棟になったままである。日本人が自ら設計建設したレンガ建ての大きな建物も完成近くになり、ソ連の市民が入居するようになった。高級マンションである。道路も、四メートル地下に大きな水道管を敷設し、石畳で舗装した道路も完成している。我々のラーゲルに課せられた作業も完成に近いように思われた。ラーゲルの警戒兵(ソ連カンボーイ)も少なくなった。兵役解除になってダモイしたと、若いソ連兵士が話していた。

大きな作業場が完成終了すると、コルホーズヤソフホーズの農作業、駅前広場の清掃、チタ博物館の見学、航空記念日に飛行場の展示機の見学、ラーゲル内

での映画鑑賞等、ダモイする年の約半年は、我々ラーゲルの一番よい時期であった。BKの役も、ソ連兵士が同行せず日本人のBKだけで作業に出て帰ってくる。ダモイが近いとの噂もあるので逃亡を計画する人もいない。ソ連人との会話も多少できるので不自由がない。ソ連には、当時、十六の共和国と九十四以上の人種が共存していた。だから日本人にも特に人種的な差別をすることはなかった。むしろ帰国してから国内で就職の際に、君はシベリア帰りだからと大変な差別を受けた。

十月、冬仕度を始めた頃に、ソ連将校より、このラーゲルは終了で、君達は東京ダモイだと聞いた。ヤボンスキー作業本部より、近日中にここは閉鎖して帰国するとの発表があった。「ダモイ、ハラショー」、我々もヤボンスキーがダモイしたら国へ帰るのだと笑顔で話していたソ連兵士ワシレンコ君は、私より一歳年上の二十歳で、国はベロルシアだと言っていた。彼は自分の使用していたアルミニウムのスプーンを記念に贈ってくれた。帰国して五十年、今でもソ連兵士ワ

シレンコ君を偲ぶことができる私の大切な品である。少年時代、異国の土地で過ごした思い出の品である。彼も私と同じように十代で親元、そして故郷を遠く離れ、シベリアの極寒の地で軍隊生活を過ごした同年配の一人として、私と同じように故郷を偲び、親、兄弟のことを思う気持ちは、立場や民族は違っても変わらないことと想像している。

ダスビダーニア（さようなら）ワシレンコ君、ダスビダーニア、チャタ第七ラーゲル。徒歩で二十分、駅前の公園は冬はアイススケート場になったこと、夏に作業に来たこと等を思い出しながら、チャタの街を後にした。

いよいよダモイ

ナホトカには二千人もの人員を収容するラーゲルがあり、ここで作業をしているヤボンスキーと、他の収容所へ移動するために集められた人々、それ以外に、帰国のため乗船待ちの人達を収容するラーゲルに分かれていることであった。この港も、かつては小さい港であったが、ヤボンスキーの労働（レポート）に

より大きく整備され、ヤボンスキーのダモイの港として日本でもよく知られるようになった。ここでは帰国を目前にし民主運動も盛んで、ソ連の社会主義国を充分認識した者からダモイが可能になるとの言い伝えから、みんな進んでソ連の指導する弁証法的唯物論とやらを民主主義研究会を通して学んでいるとのこと。イルクーツクやチタの都会では民主運動も盛んであったが、山奥のラーゲルでは何も教育されたことがないといった集団もあり、これらの集団はせっかくナホトカにまで来ているのに足止めをされたようであった。

幸い我々チタ第七ラーゲルは技術者集団のラーゲルであり、ソ連に対してその技術を通じ大変貢献し、チタの街には日本人が設計し建築した建造物、工場の修理、道路の建設、水道等の土木工事等々、ソ連発展に協力した集団として次に入港する船でダモイするという話が伝わってきた。我々のラーゲルでは民主運動はそんなに盛んな様子とは感じなかったが、チタの街周辺の運動そのものがかなりレベルの高いものであったらしく、この点からもソ連側に止めがかかっていたの

だろうか、私の場合、伐採主力の山奥のラーゲルよりチタの街の技術者集団のラーゲルへ、そして帰国するまでBKとして抑留生活をしたことが大変幸運であったと思っている。

船が入港してきた。高砂丸、病院船である。我々は病人でないのでこの船には乗船できない。次の船が早く入港しないと、海岸が凍り始めている。高砂丸に入ればかわって、今年最後になるという信洋丸が入港してきた。我々はこれに乗船することになった。いよいよソ連ともダスビダーニアである。終戦後三年六カ月、「石の上にも三年」ということわざがあるが、この三年六カ月は、少年兵を通じてこれほど過酷な経験を体験した人も少なからうと思っている。長く辛い人生であったが、今それから解放される時が近づいているのである。チタ第七ラーゲルを閉鎖する前の半年間は、間もなくダモイをする抑留者にソ連での悪い印象を少しでも和らげるようにする期間であったのだろう。ダモイを直前にしてそのように回願した。

信洋丸は日本郵船の貨物船で、戦時中は海軍の輸送

船として活躍し、戦後は我々シベリア抑留者の帰国船としてその任に当たっていた。船底の大きなスペースに皆シューバー、防寒帽等で思い思いの格好で横になつてゐる。乗船人員千五百人と聞いた。十二月の日本海は荒れていた。大きな波は八千トンのこの船を波の間に飲み込んでしまうようである。大波に乗り上げた時は、大きなスクリュウがガラガラガラと空回りしてすごい音を立てる。

三日目夕方、日本の国が見える……九州か四国か、夕闇に島影が見える。シベリアの極寒の地で過酷な労働に耐え、間もなく母、妹、弟の待つ祖国日本である。敗戦後の日本はどのようになっているのだろう。広島や長崎は、原爆の被害は、そして生まれ故郷のあの懐かしい姿は、思いは早や京都の街へ。五年も音信不通、生きてゐるのか死んでゐるのか、だれが私の帰国することを家族に伝えてくれるのか。船内放送で「明朝、舞鶴港に入港する」、最後の船中ではなかなか眠りにつくことができなかつた。

少年志願兵の抑留体験について

純粋な気持ちで国を思い、戦場に出れば死は当然とし、自分達の力の結果が国を守り、勝利を信じ、親、妹、弟の待つ祖国を遠く離れ、少年志願兵は兵役より長い時間を、極寒のシベリアで過酷な生活を送つた。強制労働を何びとがために。

少年志願兵の抑留について

シベリア抑留とは一体何であつたのだろう。人はみんな、自分が生きてきた過去を持つてゐる。しかし、忘れてしまうもの、そうでないもの、語れないもの等がある。私の少年兵当時、シベリア抑留生活はあまりにも過酷で悲しく希望のない日々の生活であつたが、何としてでも生きて日本に帰りたい、親、妹、弟に会いたい一心で生きてきた。寒さ、空腹、強制労働の生活の中では、人間は飢えのため、ひもじさのため何でも食べるものに見え、人のものも自分のものも見境なく餓鬼のようになり、黒パン一切れの切り方、おかゆの量で大変な争いになつたことも、現在の我が国では想像もできないことである。

ソ連では、数多くの民族が住んでいるので、一般市民、特に老人、女性などからは、ヤポンスキー（日本人）だから、捕虜だからといった差別を受けることはなかった。日本では民主主義という言葉聞いたことはなかったが、ソ連では当然のことであったのは大変勉強になった。

私の場合、少年兵で小さかったこと、そして、旧部隊との再会、伐採作業から技術者集団の収容所への移動、チタの都会のラーゲルでの生活、ヴァエンナプレンヌイフスバマガイヌイカマンド（BK）になったこと等、思い返すと幸運にも恵まれてシベリアで命を失うこともなく帰国できた。

抑留されて以来、私はソ連、日本政府をうらんできたが、帰国して半世紀になる。少年志願兵も七十歳に近い老人である。この先、何年生きることができるだろうか。もううらみを忘れ、素直な心でこの世より旅立つ方がよいと考えるようになり、原稿に向かった。とにかく戦争は不幸と悲しみだけが残るものであった。南方戦場で、大陸の原野で、私と同年配の数多く

の友がその青春を満たすことなくむなしく散っていった。シベリアでも六万人もの人々がいまだに極寒の地で眠っている。私は、抑留者の証人の一人として、風化していく戦争に対する体験を後世に語り伝えることが私の人生の生き方であると考えている。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十五年二月二十四日

学歴 昭和十三年三月二十五日 京都市立深草第一小学校卒業

一小学校卒業

昭和十六年三月二十五日 京都府立桃山中

学四学年中退

昭和十七年三月 陸軍少年飛行兵志願

入隊 昭和十七年六月三十日 三重県明野陸軍航空隊入隊

空隊入隊

九月三十日 滋賀県中部九八部

隊転属

昭和十八年十二月末日 満州第一六六二二

部隊転属

終戦 昭和二十年八月十五日 満州開原飛行場に

て終戦

入ソ日 昭和二十年十一月二十日

抑留地 クラスニヤード↓チタ

作業 伐採 その他

引揚 昭和二十三年十一月二十九日

引揚船 信洋丸

上陸地 舞鶴

現在 シード株式会社を設立して、代表取締役として元気に活動されている。また、老骨に

むち打って人生を生き抜き、シベリア抑留

死没者の慰霊碑建立運動を行い、遺族だけでなく、多くの府民、市民に協力を呼びかけている。

(京都市 北村 穂)

戦争と私

大阪府 中森 勇

一、家族的な教育隊

昭和十九年四月、旧満州国鉄嶺市の煉瓦建ての大きな兵舎・広い練兵場のある空き兵舎に、軍属として三重県から二十九人であったが、全国から集まっているので相当数いた。

入隊三日目に、私たち六人が吉林省九台县下九台街にある満州第二六四部隊教育隊勤務の辞令を受けた。首都新京から列車で一時間のところで、人口五万人ぐらいの静かな街で、部隊の近くに日本人夫婦の経営する漬物店があるところから、同胞が多数いるようだった。

ここも煉瓦建ての空き兵舎である。ほとんどの関東軍が南方戦線に転出したようであった。教育隊には先着の五人がおり、数日後に四人が到着し、教育隊が構